

発話に伴うジェスチャーの視点とスケールの変化

細馬宏通 (滋賀県立大学人間文化学部)

1. はじめに

特定の空間配置について語る時、わたしたちの発語とジェスチャーは、それぞれ空間を記述するための視点を持っている。しかし、その視点は一定であるとは限らない。たとえ一人の話者がひとつのエピソードについて語る場合であっても、発語、ジェスチャーのそれぞれの中で視点移動の起こる場合があるし、一つ一つのモードの中では視点が一貫していても、モード間では視点が不一致の場合もある(細馬 2003, 2004)。

会話における視点移動を考える上で、二つの概念を区別することができる。

ひとつは 水平面の座標軸に関するもので、空間参照枠と呼ばれる。Levinson (1996)は、空間参照枠として、相対枠、内在枠、絶対枠の三種類を挙げ、小さな模型を並べる課題を用いて、それぞれの参照枠の使われ方が文化によってどのように異なるかについて検証している。

もうひとつは、視点の垂直方向と記述空間からの距離とに関するものである。ここではこれを「スケール」と呼んでおこう。Emmorey (2002)はサイン言語の観察をもとに、この「スケール」に関するものを二種類挙げている。一種類めは図解的空間(diagrammatic space)と呼ばれるもので、環境は地図のように表わされる。視点は鳥瞰に保たれ、ジェスチャーの位置はやや低めの水平位置で行なわれる。二種類めは参与者空間 (Viewer space)と呼ばれるもので、物語の登場人物の一人から見た環境がジェスチャーによって表わされる。参与者空間は、道案内などでよく用いられ、登場人物が移動すれば、視点もまた移動する。

Emmoreyは、これら二種類を、サイン言語に特徴的なものとして記載しているが、じっさいには、発話に伴うジェスチャーにも図解的空間・参与者空間に対応するジェスチャーが観察できる(Hosoma 2005)。また、発話にも「上から見ると」「目の前に」など、図解的空間や参与者空間を明示するものがある。

空間参照枠もスケールも、日常会話における空間表現を考える上できわめて有用な概念である。しかし、動的なコミュニケーションを考える場合にはLevinsonやEmmoreyの行なっているような分類だけでは不足である。なぜなら、話者が話しの途中で空間参照枠やスケールを変更する場合、話し手はいかにしてその変更を明示し、また聞き手は

どうやってその変更を知るのか、という問題が生じるからである。日常会話を理解するには、単に空間参照枠やスケールを分類するだけでなく、それらがいかに変更され、その変更がいかに話し手と聞き手のあいだで共有されるかについて考える必要がある。

空間参照枠に関して、著者は、発語の参照枠が変更するあいだもジェスチャー参照枠が一貫するという規範を持っており、この規範が破られると修復が行なわれることを示した(細馬 2002, 近刊)。さらに、こうした空間参照枠の変更は必ずしも聞き手に正確に伝わるとは限らず、とくに左右の概念が含まれる際には聞き手との相互行為による修復を経る場合があることを示した(細馬 2003)。

では、スケールについてはどうだろうか。それは発話の間、一貫しているものだろうか。もし一貫していないとすれば、そこにはどのような規範があるのだろうか。

2. 方法

2.1 調査対象と実験時期

いまだスケール変化に関する知見が議論されていない現状では、まずわたしたちの日常会話でどのようなスケール変化の表現をとりうるのか、その可能性について論じることが先決である。そこでここでは、網羅的にさまざまなスケール表現を断片的に挙げるよりも、スケール変化を含むシークエンスの事例を綿密に検討する。

ここで取り上げるデータは、静岡県水窪市西浦地区での風習についての語りである。このデータを利用する理由は、この地が谷間であって、語りにおける環境との相互作用の度合いが強く、空間参照枠の変化とスケールの変化を観察しやすいからである。

会話データは2003年2月に行なった聞き取り調査に基づいている。参与者は4人で、うちインタヴューイーは、近隣地区に在住する古老(A)、西浦地区に生まれ育った男性(B)であり、インタヴューワーは二人の調査者(C,D)である。データでは、この土地に昭和30年代まで存在した「送り旗」と呼ばれる風習の話が約2分語られている。

2.2 調査地とその環境

聞き取りには、しばしばその土地の環境やさまざまなランドマークを指す固有名詞が登場する。これらの位置関係

は、発話空間を理解する上で重要な基礎知識となる。以下に、参加者と語りの行なわれた場所、および、近隣の環境を図示する。



図1 調査地（水窪町西浦地区）の環境

3. 結果と考察

3.1 会話データ

主たる語り手はBである。データに先立ち、Bは「送り旗」が近隣の寺社に奉納されるものであり、そこには匿名の祈願が書かれていることについて発話を行なっている。データでは、この送り旗が、どのような過程を経て、目指す寺社に届けられるかについての説明が行なわれている。

- B01: そうすつとね：
 →B02: ぼくら学校の帰りだとなんていうか
 →B03: 池島までは持ってけるわけだよ
 C04: あ：
 →B05: はいで街道んところここうさしとくわけ
 →B06: そうすつと今度は
 →B07: 池島あの、通って龍戸までいくような衆がおるとね
 B08: 今度またもってくわけよ
 C09: ほ[う:]
 B10: [はいで]お宮へ届く[わけ]
 C11: [はあ] : : :

発話内容と図1を見比べると、この一連の説明は、西浦地区の南東に立てられた送り旗が、小学校前を経て、池島を経由し、さらに龍戸を経由して目的地である足神さま（龍戸のさらに北東）に届けられる過程を物語っていることが分かる。

3.2 参加者空間の解消と縮小

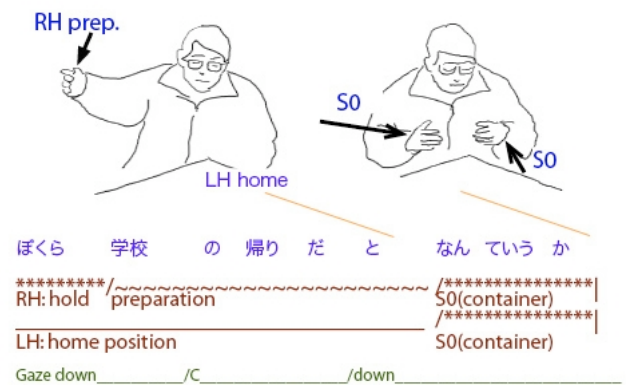


図2 B02に伴うジェスチャー。スケール縮小が示されている。

いっぽう、発語に伴うジェスチャーに注目すると、この説明は、送り旗が届けられる様子をただ図1のように俯瞰的に示しているのではないことが分かる。

まず、B02では、最初、右腕を大きく伸ばした指さしが使われている（図2）。図1のBの座席位置と指さし方向の関係から分かるように、この指さしは、Bのいる場所から見て下流方向である「遠くの衆」の居場所を指していることが分かる。またジェスチャーの大きさと方向から、この最初のジェスチャーは参与者空間を用いていることも分かる。

次に、同じB02で、Bは両手を自分の前に移動させ、「なんていうか」という言い淀みとともに、器の形を示して保持する（図2 S0）。これと同時に視線は聞き手の一人であるCから離れ、自分の手元を覗き込んでいる。

ところが、このS0は、このあとBが聞き手Cに顔を向ける直前に、すぐ解消されてしまう。

3.3 スケール変化じたいを示すジェスチャー、図解的空間の再配置

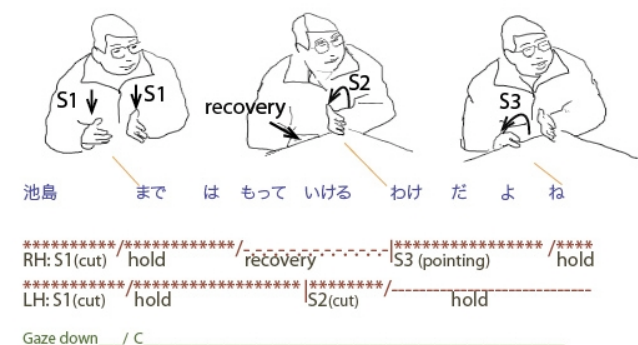


図3 B03に伴うジェスチャー。図解的空間（スケール小）の再配置。

S0に続くS1（図3）では、両手の位置はわずかにずらされ、コタツ台の上に置かれる。このS1は「池島」という地名と

ともに行なわれており、具体的な位置関係を示すジェスチャーと考えられる。つまり、S0は、言い淀み以外に明確な発話を伴わず、即座に解消されてしまうのである。

では、S0はまったく無用のジェスチャーなのだろうか。じつは図2から図3に移行する過程で、Bのジェスチャーはスケール変化を伴っている。そして、S0は、まさにこのスケール変化の直前に言い淀みともに行なわれている。これらのことから、S0は、参与者空間という大きなスケールから、図解的空間という小さなスケールに移行することを示す、いわばスケール変化じたいのマーカであることが推測される。

3.4 参与者空間の図解的空間への「挿し込み」

B03ではさらなる両手の調整が行なわれている。いったんコタツ台におかれた両手 (S1)のうち、左手はわずかにその位置をずらされ (S2)、右手はいったんホームポジションに退却したあと、指さしの形となって台の上に帰ってくる (S3)。

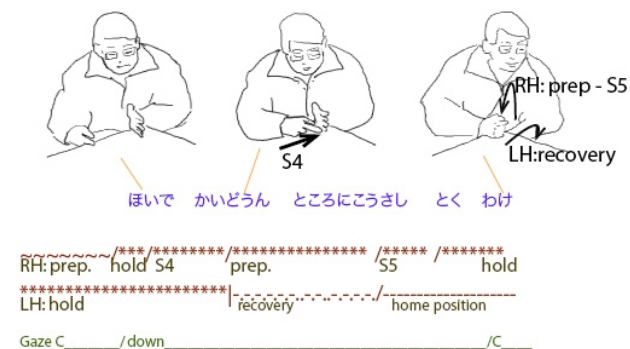


図4 B05に伴うジェスチャー。図解的空間 (小) に 参与者空間 (大) が挿し込まれる。

これらの行動が何を準備しているのかは、続くB04の発語とジェスチャーによって明らかになる。右手は指さしの形のまま、「街道」という発語とともに左手に突き当たる (図4 S4)。このことから、右手はB02発語された学校からB03で発語された池島までの街道ルートを示しており、左手は到達点である池島を示していることが分かる。すなわち、左右の手によって、「学校」「池島」「街道」の三つの関係が、Bの目の前の小さな空間上に図解的に示されているのである。

ところが、この図解的空間に続いて「(街道) んところここう挿しとくわけ」という発語とそれに伴うジェスチャーは、図解的空間を保持していない (図4 S5)。挿す動作は、話者の身体と等身大で行なわれており、いわばそれまでの図解的空間の中に参与者空間が差し込まれた形になっている。すなわち、小さな空間から大きな空間へとスケール変化が起こっているのである。

このとき、左右の手は協調的に動きながら、小さな図解的空間を 解消している (図4右)。右手は発語に示されている「挿す」行為を準備する (prep)。いっぽう、左手は、それまで示されていた池島の位置から退き、「さしとくわけ」という発語の直前に、すでにコタツの下に戻っている。この結果、それまであった図解的空間はコタツ上から取り去られ、そのあとに旗が「挿される」(S5)。つまり、参与者空間が出現する直前に、図解的空間は周到に解消され、同じコタツ上に同時に二つの異なるスケールが出現しないように工夫が為されているのである。

3.5 挿入された参与者空間の解消と図解的空間の再配置

B05で挿入された参与者空間は、B06で再び解消される。この過程を追ってみよう (図5)。

まず、「そうすつと今度は」という発語とともに、右手で握られていた拳は指さしの形に変化し、わずかに位置をずらされる (S6)。興味深いことに、これは前に左手が池島の位置をさした場所 (S2)である。もし以前に示された場所をそのまま呼び出すのであれば、左手がコタツ上に現われてもよいはずだが、ここでは左手はコタツの下に保持されたまま動かない。つまり、ここでは、右手で参与者空間を示したままそこに左手の図解的空間を呼び出すのではなく、右手の参与者空間を右手みずからが解消するという形が取られているのである。前節の例と同じく、ここでも、異なるスケールが同時に混在するのを避ける工夫がなされていると見ることができる。

このあと、右手は「池島を」という発語とともにいったん右にわずかに移動し (prep)、「とおって」で再び元の位置付近に戻って停止する (S7)。

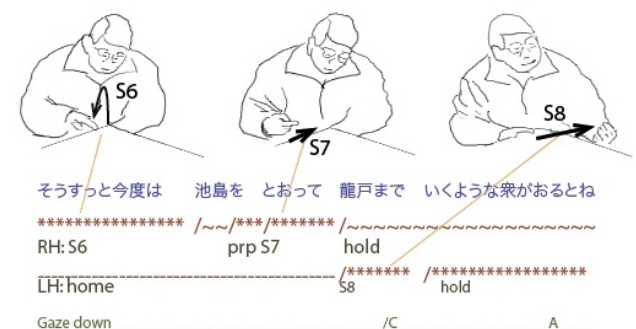


図5 B06, 07に伴うジェスチャー。参与者空間の解消と図解的空間の再配置が起こっている。

これに続いて、「龍戸まで」という発語とともに、左手が話者の左方向へと移動する。図1の地理環境と比較すると、「池島」と「龍戸」の東西南北関係は、図5の一連のジェ

スチャーでも保たれていることがわかる。また、左手はBの体の外側ではなく、下方におかれていることから、B02(図2)の場合とは異なり、ここでは図解的空間が採られていることもわかる。

B02で最初、参与者空間として出発したジェスチャーは、B03へと発語が移る際に図解的空間に縮小され、B05ではそこに参与者空間が挿入され、B06, 07でふたたび図解的空間へと戻された。この一連のスケール変化において、異なるスケールは同時にジェスチャー空間に混在するのではなく、必ずいったんそれまで用いられていたスケールを解消する手続きがとられていた。スケール変化に伴うこのような傾向は、この話者のみにとどまらず、同じ地区の他の話者にも見られる(Hosoma 2005)また実験下におけるジェスチャーにも同様の傾向が見られる(細馬 準備中)。

4. 終わりに

本論では、土地環境に根ざした会話事例を解析しながら、一続きのジェスチャー単位の中に、異なるスケールを持つジェスチャーフレーズが混在している例を示した。このような場合、スケール変化に際して、スケール変化そのものを示すジェスチャーが存在し、発語にはあらわれない変化を明示することがある。また、異なるスケールに移行する際には、それまで保持されていたスケールが手の動きによって周到に破棄され、次のジェスチャーとのスケールの混乱を避ける工夫がなされることもある。

本論で論じた図解的空間に対する参与者空間の「挿し込み」に関連して、最近、発達心理学の分野で興味深い知見が得られている(DeLoche et al. 2004)。これは一八ヶ月から三〇ヶ月の幼児に時折見られる行動で、幼児たちは、人形ごっここの椅子に座ろうとしたり、ときにはミニチュアカーの中に入ろうとする。DeLocheらは、こうした現象の起こる理由として、幼児期において視覚と運動系の統合が未発達であることを挙げ、この行動を「スケールエラー」として扱っている。

おもしろいことに、本論で示したスケール変化に伴う成人のジェスチャーは、その形態だけ見るならば、こうした幼児期の行動に酷似している。唯一異なるのは、成人の場合、こうした異なるスケール間の動作を、発話行為の中で組織化しているという点である。となれば、ミニカーに足を踏み入れようとする幼児の行動は単に「エラー」と捉えるよりも、成人におけるスケールの組織化の萌芽として捉えるほうが自然に思われる。むしろ問題は、幼児から成人にいたる過程で、わたしたちがどのようにスケール変化の組織化を身につけていくかという点にあるだろう。

5. 参考文献

- DeLoache, J.S., David H. Uttal, and Karl S. Rosengren (2004) Scale Errors Offer Evidence for a Perception-Action Dissociation Early in Life. *SCIENCE* vol. 304 1027-1029.
- Emmorey, K. (2002) *Language, cognition, and the brain*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc. New Jersey.
- Levinson, S.C. (1996). Frames of reference and Molyneux's question: crosslinguistic evidence. In P. Bloom et al. (Eds.), *Language and space*, (pp.109-169). Cambridge, MA: MIT Press.
- 細馬宏通 (2002) 思考を漏らす身体 -ことばとジェスチャーの参照枠問題- 相互行為の民族誌的記述-社会的文脈・認知過程・規則- (研究課題番号11410086) 平成11年度-13年度科学研究費補助金(基礎研究(B)(1))研究成果報告書 pp.149-162
- 細馬宏通 (2003) 祭礼空間を語ることばとジェスチャー -水窪町西浦田楽別当の語り- 人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD 101-2(6/15) pp.47-51
- 細馬宏通 (2003) 対面会話におけるジェスチャーの空間参照枠と左右性 人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD 101-2(6/15) pp.1-4
- HOSOMA, H. (2005) Perspective Choice and Frames of Reference in the Storytelling of a Japanese Traditional Festival, *Nishiure Dengaku*. In *Construction and Distribution of Body Resources: Correlations between ecological, symbolic and medical systems*. Kazuyoshi Sugawara (eds.), pp. 161-170, RILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- 細馬宏通 (近刊) 修復をとらえなおす -参照枠の修復における発話とジェスチャーの個体内・個体間相互作用- 串田秀也・定延利之・伝康晴編『文と発話』ひつじ書房
- 連絡先** 細馬宏通 〒522-8533 彦根市八坂2500 滋賀県立大学人間文化学部 hhosoma@shc.usp.ac.jp